

善男子考

——經疏における女性差別——

工藤英勝

問題の所在

仏教教理と差別 (discrimination) という問題は、その解明の必要性がしばしば説かれるわりには、現実には、明瞭な視点を確立することさえ至難な状況にある。

このような状況の責任は、確かに仏教者の主体に問題があるが、それだけではなく、差別問題が、我々の想像する以上に、如何に根深く、広汎に仏教教理や主体に関わってきたのかという反証ではないだろうか。

本稿は、西明寺円測 (六一三～六九六) 撰述の『解深密經疏』巻第二にみられる「善男子」解釈をひとつの手掛かりとして、特に女性差別の問題を考察するものである。問題の「善男子」解釈のテキストを次に引用する。

解甚深義密意菩薩。謂如理請問菩薩曰。(…中略…) 善男子。一切法者略有二種。所謂有為無為

釈曰。(…中略…) 初善男子者。讚能問者。後一切法下。依問

印度學佛教學研究第三十八卷第一號 平成元年十二月

正答。此即初也。依智度論三十五云。男子言簡非男子等不堪教授。善謂善相。謂具慈悲。三業無失。樂於善人。不顯己德。隨順衆人。不求世間名譽等樂。但崇道德。自業清淨。心貴実相。輕賤世事。有如是等無量善法。此相多在男子身中。是故讚言善男子也。

前半「解甚深義有為無為」は、『解深密經』の經文(以下、本經と略す)であり、次の「釈曰」以下が、円測の解釈(釈文と省略)である。

一 本經のコンテキストにおける善男子

本經の引用文は、『解深密經』巻第一の「勝義諦相品」の冒頭にある。その場面の設定をかいつまんで言えば、仏前にあって、如理請問菩薩は解甚深義密意菩薩に対して、次のような質問を發した。「一切法は無二と言うが、一体何が一切法であり、どのようなことを無二とするのか?」と。解甚深

義密意菩薩がそれに答えて、「善男子よ、一切法とは大略するに二種類がある。それは有為と無為である」と言うのである。

このような本経のコンテキストから、「善男子」の位置付けを見ると、ここの善男子とは、解甚深義密意菩薩から如理請問菩薩への呼びかけの言葉であって、さして重要な意味をもっているわけではない。むしろ、解釈の必要も無いくらいなのが、円測の釈文ではあえて『大智度論』を引用して、善男子釈を試みたわけである。

『大智度論』の引用方法の問題はさることながら、この箇所の円測の解釈は、他の簡潔明瞭な註釈態度からすると、例外的に冗長で、蛇足に過ぎる感がある。単なる呼びかけの言葉に、必要以上にこだわり、男子の女人に対する本質的優位つまりは女性差別を強調するが如き註釈を行なっている。本経の「善男子」の解釈という観点からは、円測の釈文は、コンテキストを逸脱している疑いがある。

二 『大智度論』引用方法の妥当性

円測疏に於ける「善男子」解釈の多くは、『大智度論』（以下は論と省略）巻三五に依っているので、実際に『論』の本文を挙げて、その引用方法の是非を検討していきたい。

【圖舍利弗。是菩薩摩訶薩行般若波羅蜜。增益六波羅蜜時。諸善男

子善女人各各歡喜意念我等當為是人作父母妻子親族知識圖（…中略…）問曰。何以但說男子女人善。不說二根無根者善。答曰。無根所謂無得道相。是故不說。如毘尼中不得出家。以其失男女相故其心不定。以小因緣故便瞋。結使多故著於世事。多懷疑網不樂道法。雖能少少修福事。智慧淺薄不能深入本性轉易。是故不說。声聞法如是說。摩訶衍中譬如大海無所不容。是無根人或時修善。但以少故不說。（…中略…）二根人亦如是。心多邪曲故不任得道。以是故但說男子女人中善者。善相者有慈悲心能忍惡罵。（…中略…）復次三業無失樂於善人不毀他善。不顯己德隨順衆人不說他過。不著世樂不求名譽。信樂道德之樂。自業清淨不惱衆生心貴實法輕賤世事。唯好直信不隨他誑。為一切衆生得樂故自捨己業。令一切衆生得離苦故以身代之。如是等無量名為善人相。是相多在男女故說善男子善女人。（傍線は共通部分）

ここに明らかなように、円測の引用文は、『大智度論』の本文そのままではなく、趣意である。もっとも『疏』にも「智度論の三十五に依らば」とあるから、それでも一向にさしつかえがあるわけではない。問題なのは、『論』の本文と同趣旨の引き方であるかどうかである。

『論』の記述によれば、ここの箇所は、本経である『大品般若經』に「諸善男子善女人」とあることについての註釈である。『論』では「問うて曰わく。何を以ってか但だ男子女人の善のみを説きて、二根と無根の者の善を説かざるや」との問いを出して、二根・無根者を簡んで、「善男子善女人」

とだけ言う理由を尋ねている。この質問の解答部分の中に、円測の引用部分があるわけである。

円測の引文では、『論』の本文の他に、「男子の言は非男子等の教授に堪えざるを簡ぶ」「此の相は多く男子の身中に在り」の語を加えて、独り「善男子」のみを讃嘆して女人等を除外している。『論』の趣旨とはかなりの相違が認められる。特に、後者の「此相多在男子身中」にあつては、『論』の「是相多在男女」の部分の故意に替えたもので、正当な引用方法とは言い難い。

西明寺円測は玄奘三蔵門下として、慈恩太師基とともに二大法将と並び称されている。その註釈方法、語学力、論証能力などは、現在の仏教学でも高く評価されている。それからすれば、かかる「善男子」解釈は、きわめて特殊で例外的な事例と言えるかも知れない。

円測によるこの変則的な『論』の引用の仕方の理由を、『論』じしんの底本の違いとして弁護することもあろう。つまり、円測が意図的に本文を改変したのではなく、円測が当時参照した『論』の本文がそうであったと見るのである。しかしこの可能性はまずありえない。なぜならば、本経の『大品般若経』の本文の「善男子善女人」は動かしようのない部分であるので、この箇所からは、独り善男子のみを讃嘆するような解釈は出てくることは有り得ないからである。

故に、円測の『大智度論』の引用方法の正当性を証明し得る積極的根拠は見出すことはできない。

三 『大智度論』の女性観

前項では、円測の「善男子」解釈の典拠となっている『大智度論』の引用方法に問題があることが明らかとなった。特に問題とされる点は、『論』の趣旨を逸脱した女性差別の論理を強調していることである。

円測『疏』の「善男子」釈にみられる、男性の女性に対する本質的優位性もしくは否定的な女性観の遠因は、引用された『大智度論』の女性観に求められないであろうか。この点については、大鹿実秋・永田瑞両氏の「大智度論の女性観」、永田瑞氏「女人五礙」等の論考がある。

永田氏によれば、『論』の女性観の特徴として、次の四点が指摘されている。

①五障礙説 ②三従説 ③浅智 ④深欲

①五障礙説とは、女性に仏陀・転輪聖王・魔王・帝釈天・梵天王になれないことを言うものである。この説は『法華経』をはじめ大乘の經典に定型化されている。『大智度論』の中でこの五障礙説がとりあげられているのは、三箇所ある（巻二・巻九・巻九）。

次に②三従説について、『論』巻九九には「一切女人無所

繫屬則受惡名。女人礼幼則從父母。少則從夫。老則從子^③とある。この三從説は阿含や律藏の原型部分ではみられず、インドのクシャーナ王朝以降の諸経論にみられ、特にバラモン法典の『マヌの法典』の規定とはほぼ一致していることが指摘されている。

女人は男子に比して、③浅智、④深欲であることについて『論』巻一四では

復次菩薩觀欲種種不淨。於諸衰中女衰最重。刀火電雷毒怨家毒蛇之属猶可暫近。女人慳妬瞋諂詔妖穢閹諍貧賤不可親近。何以故。

女人小人心浅智薄唯欲是視。

とあり、仏道の最大の障害として女性を上げ、その理由としては「心浅く、智慧薄弱で、欲のみにおもむく」ものと規定する。

以上のような四点を核として女人蔑視や差別的発想が、『大智度論』自身の中に散在しているわけで、円測もこの発想を予断として受け取り、本来の文意を必要以上に拡大解釈して、前述の如き男性の女性に対する本質的優位性を述べるに至ったものと考えられる。

四 若干のまとめと残された問題

円測の善男子解釈には、引用された『大智度論』の本文にはない男子の女人に対する本質的優位性という価値づけを付

加していることが明らかになった。

円測が善男子の解釈のためにその論拠とした『大智度論』巻第三五には、それに加えて無根者または二根者への徹底した差別が横たわっているのであり、このことをわれわれはいかに説明したらよいのであろうか。この「二根」「無根」を信仰上のひとつの比喩として理解することが仮に妥当としても、一般的には、両性具有者や無根者の性的な器質的・機能的障害への差別である。

女人差別の深層にある無根・二根人への差別は、何もこの箇所だけの特殊例外ではなく、すでに仏教の教相上一般化しているのではないか。

仏教にとって、差別の問題は決して偶発的な事件や過失ではなくて、むしろその中枢にまで根差している。今後、仏教と差別との関りを注視していきたいと思う。

- 1 正統藏経・三四・三二四・左下
- 2 大正藏・二五・三一六・上
- 3 印仏研・三八／五六号
- 4 印仏研・二四卷第一号
- 5 大正藏・二五・七四八・中
- 6 大正藏・二五・一六五・下

△キーワード▽ 円測、解深密経疏、大智度論、女性差別、二根無根者差別

（曹洞宗教化研究所研究員）